

常磐東小学校 校長だより

常磐緑

令和六年一月十九日 第十号



苦難耐え命を燃やす寒椿

甲辰の年の幕開け。能登半島地震発生の警報アラームと、テレビの一斉放映に、穏やかな正月ムードは一変した。その被害状況もおぼろげな翌日に起きた飛行機事故。日本航空機の乗員全員が助かったことに胸をなで下ろしつつ、海上保安庁の航空機の飛行目的と乗務員の結末にやりきれない気持ちになる。

学校では、南海トラフ地震とそれに伴う火災を想定し、学期ごとに避難訓練を行っている。また、今年度は緊急地震速報の作動により、緊急対応をする機会が三回あった。八月に計画・実施した体育館での全校シェイクアウト訓練では、ほとんどの子が窓ガラスやバルコニーの落下を避け、体育館中央で後頭部を守ってうづくまっていた。そんな中で、ピアノの下に潜り込む子がいた。教室では机の下に隠れることから、丈夫なピアノの下こそが天井の崩落から身を守れると判断したのだろう。しかし、大地震では重いピアノが移動し、または足が折れて下敷きになることがある。周りに同調せず、自ら考えて行動したことを認めつつ、危険の可能性について想像

し、学ぶ機会となった。

一月の避難訓練は、実施時刻を子供に予告せず、清掃時に実施した。教師は各所で子供を観察し、訓練後に場所ごとに行動を振り返らせて指導した。放送で火災箇所を聞き、安全な経路として非常階段を率先して使ったことを称賛する一方で、避難指示を聞き逃して行動が遅れた子や、慣れない場所での机の下に隠れようかためらい、教師の顔をうかがう様子が見られた子には、大人がいなくても自分で判断し、行動する大切さを諭した。

さらに、感染症の影響で三年間実施できずにいた三階ベランダからの救助袋による降下訓練に、四年生以上が取り組んだ。誰もが初体験であり、高所に対する恐怖心から体験できない子が現れるのではと予想していた。しかし、全員が順番通りに実施できた。素早い避難が自分の命を守るとともに、後に続く仲間の命を守ることになる。勇気を振り絞った行動であったと評価できる。

震災の避難所となった学校や、親元を離れて授業を受けようとする避難する中学生のニュースを見るにつけ、毎日の授業ができる幸せをかみしめる。そして、いざというときに無事に避難できるよう、不要物や危険物の撤去と点検・修繕を随時進めている。

六十年前の甲辰の年、常磐東小学校では、前年に校歌が制定され、三月に校歌碑(校舎移転後、現在の児童玄関前に設置)を作成した。歴史と伝統を引き継ぎ、その恩恵を受けて発展させられるのも、命あってのものである。「非常災害」の警鐘の響く中、命を守る知恵と力、助け合いの精神を身に付け、躍進の年へと舵を切りたい。



←大谷翔平選手から3学期を迎えた子供たちの心を温めました。ぜひご覧ください。